日蓮大聖人御書全集

富木尼御前御返事

ときあまごぜんごへんじ

新版
1316
〜
1317

富木尼御前御返事

建治2年('76)3月27日　55歳　富木尼

鵝目一貫ならびにつつひとつ、給び候い了わんぬ。

やのはしることは弓のちから、くものゆくことはりゅうのちから、おとこのしわざはめのちからなり。いまときどののこれへ御わたりあること、尼ごぜんの御力なり。けぶりをみれば火をみる。あめをみればりゅうをみる。おとこを見ればめをみる。今ときどのにげんざんつかまつれば、尼ごぜんをみたてまつるとおぼう。

富木殿　おんもの語　母歎

ときどのの御物がたり候は、「このはわのなげきのなかに、りんずうのよくおわせしと、尼がよくあたり、かんびょうせしことのうれしさ、いつのよにわするべしともおぼえず」と、よろこばれ候なり。

臨終善　看病嬉　世忘　覚束　覚束

なによりもおぼつかなきことは御所労なり。かまえて、さもと三年、はじめのごとくにきゅうじせさせ給え。病なき人も無常まぬかれがたし。ただし、としのはてにはあらず、法華経の行者なり。非業の死にはあるべからず。よも業病にては候わじ。たとい業病なりとも、法華経の御力たのも

灸治　年果　免　非業　業病　法華経　行者　候わ

し。阿闍世王は法華経を持って四十年の命をのべ、陳鍼は十五年の命をのべたり。尼ごぜん、また、法華経の行者なり。御信心、月のまさるがごとく、しおのみつがごとし。いかでか病も失せ寿ものびざるべきと強盛におぼしめし、身を持し心に物をなげかざれ。

なげき出で来る時は、ゆき・つしまのこと、だざいふのこと、かまくらの人々の天の楽のごとにありしが、当時つくしへむかえば、とどまるめこ、ゆくおとこ、はなるるときはかわをはぐがごとく、かおとかおとをとりあわせ、目

と目(め)とをあわせてなげきしが、次第(しだい)にはなれて、ゆいのはま、歎離由比浜
いなぶら、こしごえ、さかわ、はこねざか、一日二日すぐ稲村腰越酒匂箱根坂いちにちふつか過
るほどに、あゆみあゆみとおざかるあゆみも、かわも山も歩遠川やま
へだて雲(くも)もへだつれば、うちそうものはなみだなり、ともな隔打添涙供
るものはなげきなり。いかにかなしかるらん。かくなげか歎悲歎
んほどに、もうこのつわものせめきたらば、山か海も蒙古兵攻来やまうみ
いけどりか、ふねの内か、こうらいかにてうきめにあわん。生捕船うち高麗憂目遭
これひとえに、失(とが)もなくて日本国(にほんこく)の一切衆生(いっさいしゅじょう)の父母(ふぼ)たる
法華経(ほけきょう)の行者(ぎょうじゃ)日蓮(にちれん)を、ゆえもなく、あるいはのり、あるい故罵

は打ち、あるいはこうじをわたし、ものにくるいしが、十羅刹のせめをかぼりてなれることとなり。またまた、これより百千万億倍たえがたき事どもいで来るべし。かかる不思議を目の前に御らんあるぞかし。

我らは仏に疑いなしとおぼせば、なにのなげきかあるべき。ささきになりてもなにかせん。天に生まれてもようしなし。竜女があとをつぎ、摩訶波舎波提比丘尼のれちにつらなるべし。あらうれし、あらうれし。南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経と唱えさせ給え。恐々謹言。

さんがつにじゅうしちにち
三月二十七日

あま　御　前
尼ごぜんへ

にちれん　かおう
日蓮　花押